

少しだけ深く読み解く

# 「詩劇としての能」

## 03

# 「融とおる」のすべて

京都芸術大学 芸術学舎 二〇二二年度 春季 舞台芸術研究センター提供連続講座



写真：平成二十五年二月二日「春秋座―能と狂言―」より「能融」観世鍊之丞（撮影：清水俊洋）



### オンライン講座

（遠隔WEB受講・受講生登録制）  
講座番号 G2315104

担当講師

## 天野文雄

大阪大学名誉教授／能楽研究

### 七〇〇年の歴史とともに考える 「現代に生きる能」の魅力

本講座では、「春秋座―能と狂言―」シリーズで上演されてきた能のなかから一曲をとりあげ、その映像を用いて「能」という舞台芸術の特色と魅力を考えます。三回目となる今講座では、光源氏のモデルといわれる左大臣源融（みなもとのとおる）が陸奥松島湾の塩竈しおがまの致景を移して風雅な日々を送ったことに取材した世阿弥作の『融』をとりあげ、テキスト、典拠、演出、上演史などから、最終的に『融』の主題とそれをささえている趣向について考えたいと思います。用いる映像は、平成二十五年の春秋座における観世鍊之丞氏の舞台、恒例のゲストにはシテ方観世流の大槻文藏氏（人間国宝、文化功労者）をお招きします。毎回、あいだに5分の休憩をはさみ、最後に20分ほど質問の時間を予定しています。大学の通信教育部の講座ですが、能に関心をもつ一般の方も受講できます。どうぞお気軽にご参加ください。

各回 19時00分～21時00分

第1回 4月19日（水）

第2回 5月3日（水・祝）

第3回 5月17日（水）

第4回 5月31日（水）  
〈ゲスト〉大槻文藏

第5回 6月14日（水）

■受講料（全5回） 1万8千円

■定員 200名

■お申込み受付開始

2023年3月8日（水）13時00分

■お問い合わせ

京都芸術学舎

TEL 075-791-9124

受付時間 10時～16時（月～土）

お申込みはこちら  
（WEBのみ）

お申込から

受講開始までの流れ

※春季講座情報は2023年3月1日（水）に公開されます

4 / 19  
(水)

### 第1回 これから『融』を学ぶために

この回では、まず、春秋座で上演された映像をもとに、『融』という作品の概要をみなさんと共有したうえで、世阿弥の芸論にみえる『融』の記事、その典拠や上演史、現代における『融』についての諸家（評論家や研究者）の理解など、『融』についての基本的な事項を紹介します。また、主人公（シテ）源融は実在した人物であり、平安時代の説話集や歌学書などにも比較的よくみえているので、それらの紹介とともに、融が愛した陸奥の歌枕塩竈についても紹介する予定です。なお、この回の受講に先立って、『融』読解のためのヒント（京都芸術劇場WEBサイト掲載）に目を通していただくと、この講義がどのようなことを問題にし、最終的にどのようなことをお話ししようとしているかが、あるていど理解されると思います。

### 第2回 『融』のテキストを読む

この回では『融』のテキスト（詞章）全体を、適宜、コメントを付しつつ読むことにします。能のテキストは「謡曲」とも呼ばれますが、それは詞章が散文ではなく節がついているからで、「謡（うたい）」と呼ばれるのもそのためです。その能のテキストは掛詞、縁語、序詞といったレトリックを多用し、頻繁に古今和漢の詩歌が引かれる韻文、つまり詩的なもので、かつては「綴（つづ）の錦（にしき）」などと揶揄された文体で構成されています。それだけに、現代においてはとくに敬遠されがちなのですが、能の魅力はこのテキストに向き合うことによって倍増するはずで、この回では、とくに『融』のなかでも比較的凝った文句や、『融』理解のポイントになるような部分の説明に時間を割きたいと思っています。

### 第3回 『融』の作意を考える

この回では、過去2回の講義を受けて、『融』の「作意」について考えます。「作意」というのは、作者がどのような趣向（工夫）によって何を描こうとしたのかということですが、思えば、能については不思議なくらい「作意」ということが考えられてきませんでした。その代わり、常に注目されてきたのが演者の「芸」です。「作意」という「全体」には無関心で、名手の「芸」という「部分」に注目してきたのが、江戸時代以降の能の見方だったと言ってよいでしょう。もちろん、世阿弥時代の能には「主題」があり、世阿弥の能も例外ではありません。現代の能の鑑賞には演者の芸だけでなく作者の意図（作意）にも留意する必要があります。世阿弥も「目智相応（舞台を見る目と作品理解のバランス）」を観客に求めています。

5 / 31  
(水)

### 第4回 大槻文藏氏が語る『融』

〈ゲスト〉大槻文藏

現代の能楽界を牽引するお一人、大槻文藏氏を迎えて、演者からみた『融』についてお聞きします。大槻氏は早くから、大阪の大槻能楽堂の当主として、現代の能はどうあるべきかを考えてきた演者です。それが「よい能を低料金で」という理念のもと、流儀を問わず東西の名手を招聘する自主公演の誕生となり、能楽研究者との協働によって廃絶して埋もれていた名曲を復活させる活動につながりました。また、かつて「現代の知性」といわれたその舞台は、近年いよいよ円熟の境に入っています。本学との縁としては、平成二十七年の復曲能『菅丞相』の春秋座での再演、平成三十年の公開連続講座「日本芸能史・人間国宝の世界」への登壇があります。

6 / 14  
(水)

### 第5回 これまでの補足と『融』が到達した主題

この回では、これまでの補足として、『融』読解のためのヒント」にかかげた、小書（こがき／特殊演出）を中心とした『融』の演出のこと、ユニークなワキ僧の造形、『塩竈』という本来の曲名が意味すること、『融』と観阿弥が演じたという廃絶した『融』の大臣の能との関係、唐の詩人賈島（かとう）の「推敲」詩が担っているもの、融が月の都の住人であるかのような設定など、十分にふれることがなかったことについて考え、『融』の作意が生前の風流生活への懐旧であること、さらにその懐旧の情が融個人の思いを超えた、一種、普遍的な色彩を帯びていることについてもお話ししてみたいと思っています。

■受講料（全5回） 1万8千円

■定員 200名

■お申込み受付開始

2023年3月8日（水）13時00分

■お問い合わせ

京都藝術学舎

TEL 075-791-9124

受付時間 10時～16時（月～土）



お申込みはこちら（WEBのみ）



お申込から受講開始までの流れ



読解のためのヒント（劇場WEBサイト）

※春季講座情報は2023年3月1日（水）に公開されます